第廿七

百亭

傳文庫

上

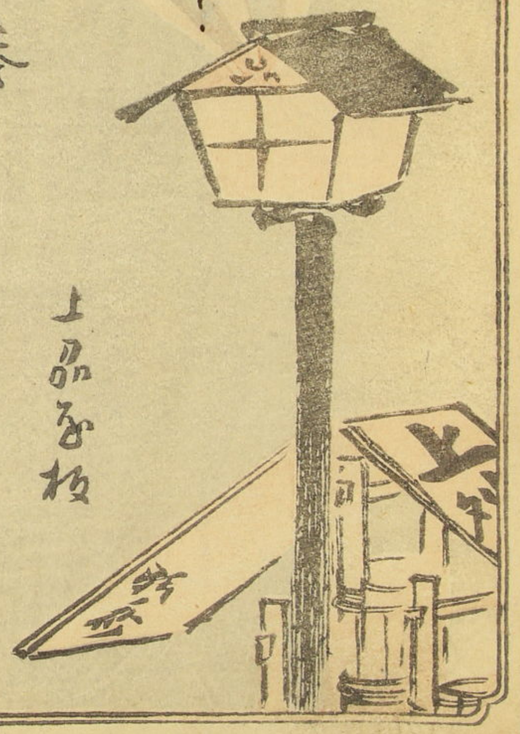
へ13
3749
26

門へ13
3749
春 26

如来之庫

五十三編

上巻



如来之庫 五十三

釋迦八相倭文庫第五十三編序

夫速疾立驗摩醯首羅説阿尾奢經を引翻て名づく如来庫羅

可也ゑんま王手下華那羅延の香醉あらくが香商人より擬ふ歟

摩訶半陀の一段ハ經顯を狂言ゆゑ樂特ざく凡盆休あく

中途般陀の説ル有ど善見物の律ぎのハ増一阿含の欠よく見が

眼の徳見附柱世界の舞墓を覚る時ハ凡小智識の足掛木火

土金水働く囉子方ゑ〳〵てつゆゑ色へぞくハ替是五子の地獄へ

行を支るのでおもらうと例の能あ〳〵序の舞を云吏ふり

文久四年
甲子春

南花堂 万真庵賀誌

よび灸医竜王女を
毘娑那國の
大殿は
寄る
灸医
竜王女
提婆達多

伽留羅提舎婆の
命かのゝ阿尾奢の
法を行ひ摩醯首羅
を祈りて善愛女お、
善愛
女
伽留羅提舎

增一阿含經曰
爾時尊者槃特告兄朱利
般特曰若不能持戒者還作
白衣時朱利槃特聞此語已
便詣祇桓精舍門外立而墮淚
善見律曰

炭焼の夫

槃特
千金の
栴檀香を
炭かゆくに
等しと
易る

兄摩訶般陀心自念此人
於佛法無當遺還家
即語周羅般陀言
汝今鈍根即牽袈
裟驅令出門於門外啼
哭不欲還家等云々

富留那著闍崛を
出て摩伽羅山麓の
於く輸曇弥尼の
造罪の霊を度し
又摩訶般陀の智戒を
追て祇桓精舎へ赴く

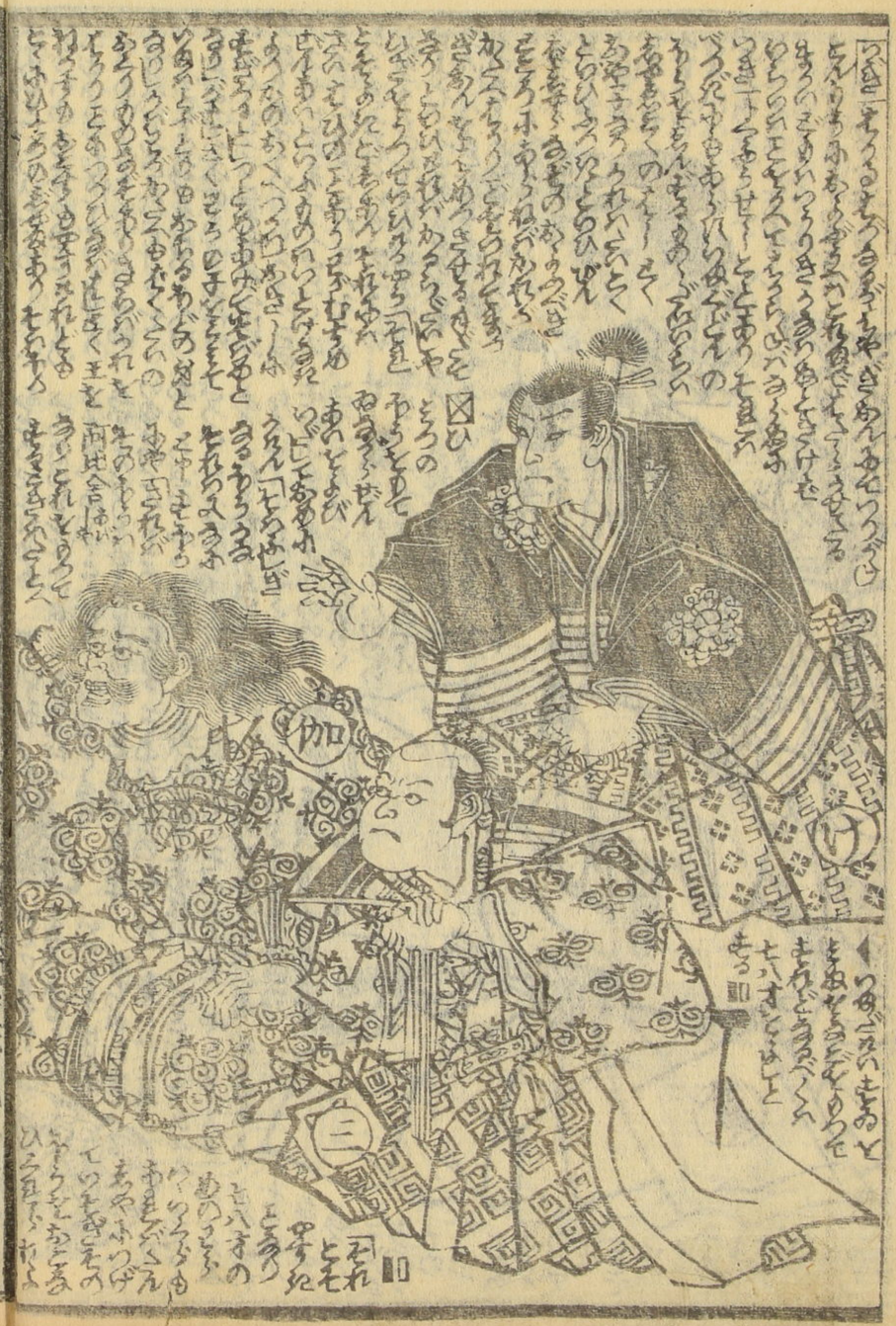
漁父霊の

富留那尊者

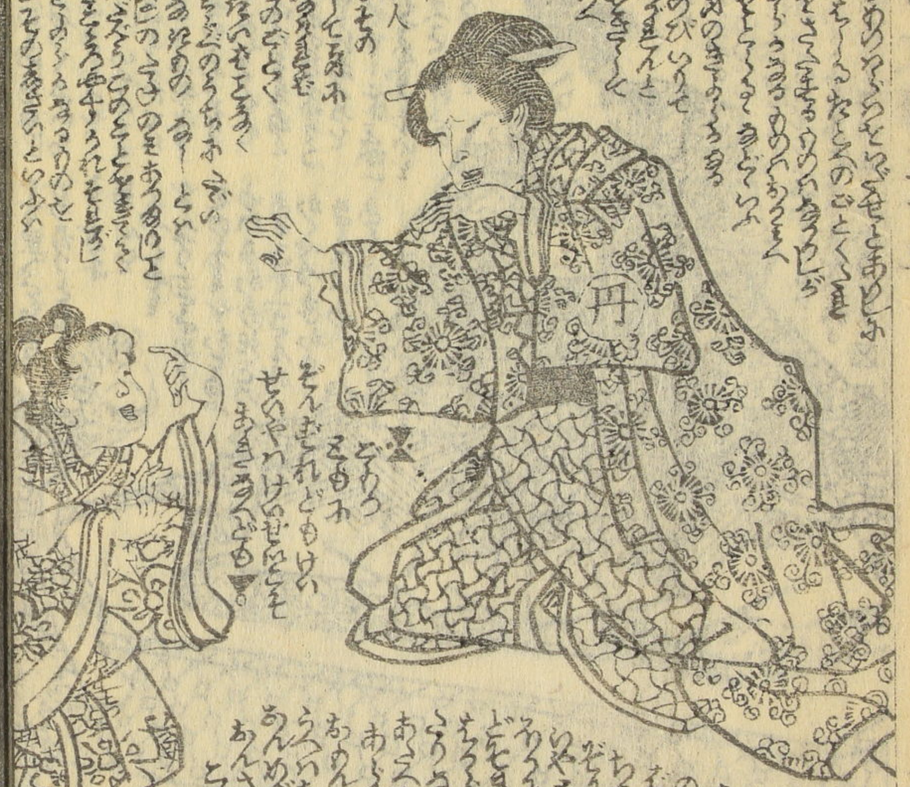
周利槃特

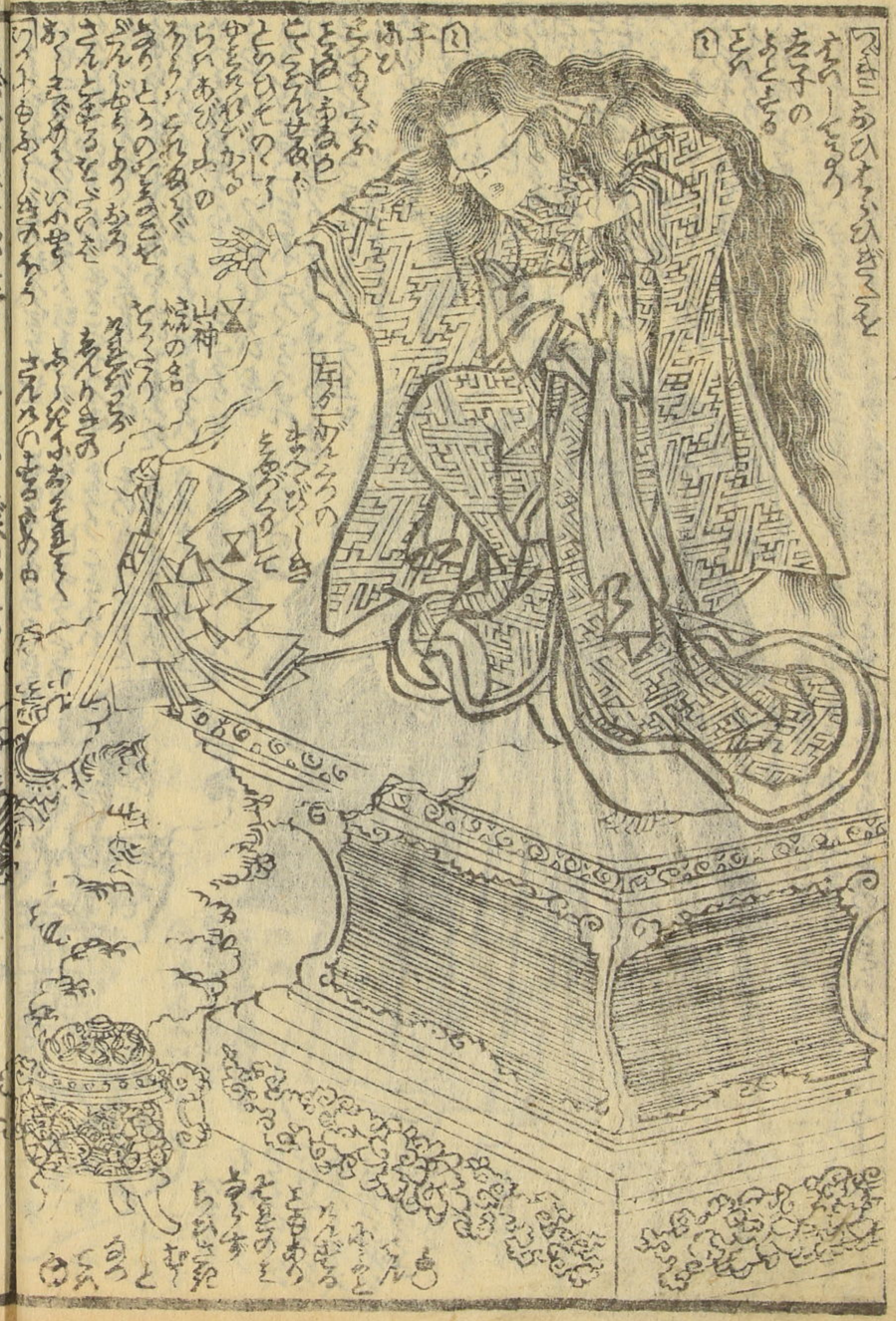
提

貞



[illegible]





應賀作 國貞画

傾文庫出世双六	應賀作 豊國画	春の遊将棊双六	同作 貞房画
男女振合役替双六	同作 同画 拙あもしころ紀きいれあり	武家奉公出世双六	同作 豊國画
奥奉公出世双六	同作 同画	子寶延命袋	同作 同画 紅摺全一冊
重榮御江戸繪圖	奉書四枚半つゞき	大寶御江戸繪圖	極上摺奉書六枚半續

下

倭文庫

五十三編

下巻

虚堂作

東京 青山堂 蔵版

五十三ぺん下

ロこれいこのまろくこれのまちふもあひまるめのうの
あさうごまうもんぐごまうすめでござる そもぐ
そんぐいうことけうようぐちうまうのでござれば
あぐーふいうのそたれんさんがくとのくさせそござれば
りゑふあのそうからのいちばぐふあなりぬのでも
ぐござれいをびとこれとふあなぐばらうさうにようく
こうぐいひとあばざのけんぐうのてあさうぐば
うろうひまちちをえうじめうとすてござれいたびとへうく ちうろうござ
あのそもぐあもんあもあめつれきてうく
せらうとこのこでござれいからくいまうり
もうそびうへうござれと
りそやあのぐやうろ
そんとふこまでみそなちまうさふとぞんずる

二段○ひとのあやのこころふやこふおふれ
ぎも子をちりふをちとひとすゝトにまろく
さんへとのそろん△これいうびらおやうありのそ
たる女のおそれろうらんえんひるふぐぐえの
子とひろうくゆへためのおこころえるせがれの
くえおづけなやとぞんぐいのふくもんぐく
こちをいうそぎゆ●ハアにこまろくござる
△こまぐくもりひきろーんごとく

上皇校

国安書

▲とあげてまねらくイデ

○あまたへそれて

「アくあのう
みとといさき
ぬりのみそゆ
こそいぬ
めのめうこと
みそゆよ
○ハア
いぬのめうそやいそや
うのまで

ござろ〳〵「うらく〳〵
それもあじゆ●「か」こゝろそ
ござる〳〵「それやもちぐらそぎ
ぬがこれぐまうらうさんのまち
あそゆあれあのいまんじが
あまうそんぐまのいみそ
ゆでこうくとのかまうり
たみゆいでものつもめく
邑にむそうくもこのきの
ぐくみぐじゆみとれうい

寿訶般陀　兄弟の説
周利般特

法華経授記品佛本行経増一
阿含経補注名義集毘奈耶
大毘婆沙論谷響集等ゟ
説ところまちく〳〵ゆーて或
同名或い兄と弟とーて不明

ものれぐでゝ善見律ゟ依ゝ汎い
寿訶般陀い兄周利般特ゟ
弟あり其母い本大福長者
の女ゆーて七層の樓ゟ
居て私ゟ奴子ゟ通ト父母ゟ
責らくこゝ患て奴子と
他國一辺て住るこの由ゟ
○「これいかゝうそのおもひ
ようあんうえりあくばかり
半路ゆく一男ゝ産む是に
寿訶般陀あり此時奴子
追欠きく連帰り又懐妊
ゝ又女一人故々〳〵久る半路
ゆて一男ゝ生是周利般特
あり母るゟ故兄ゝ大路

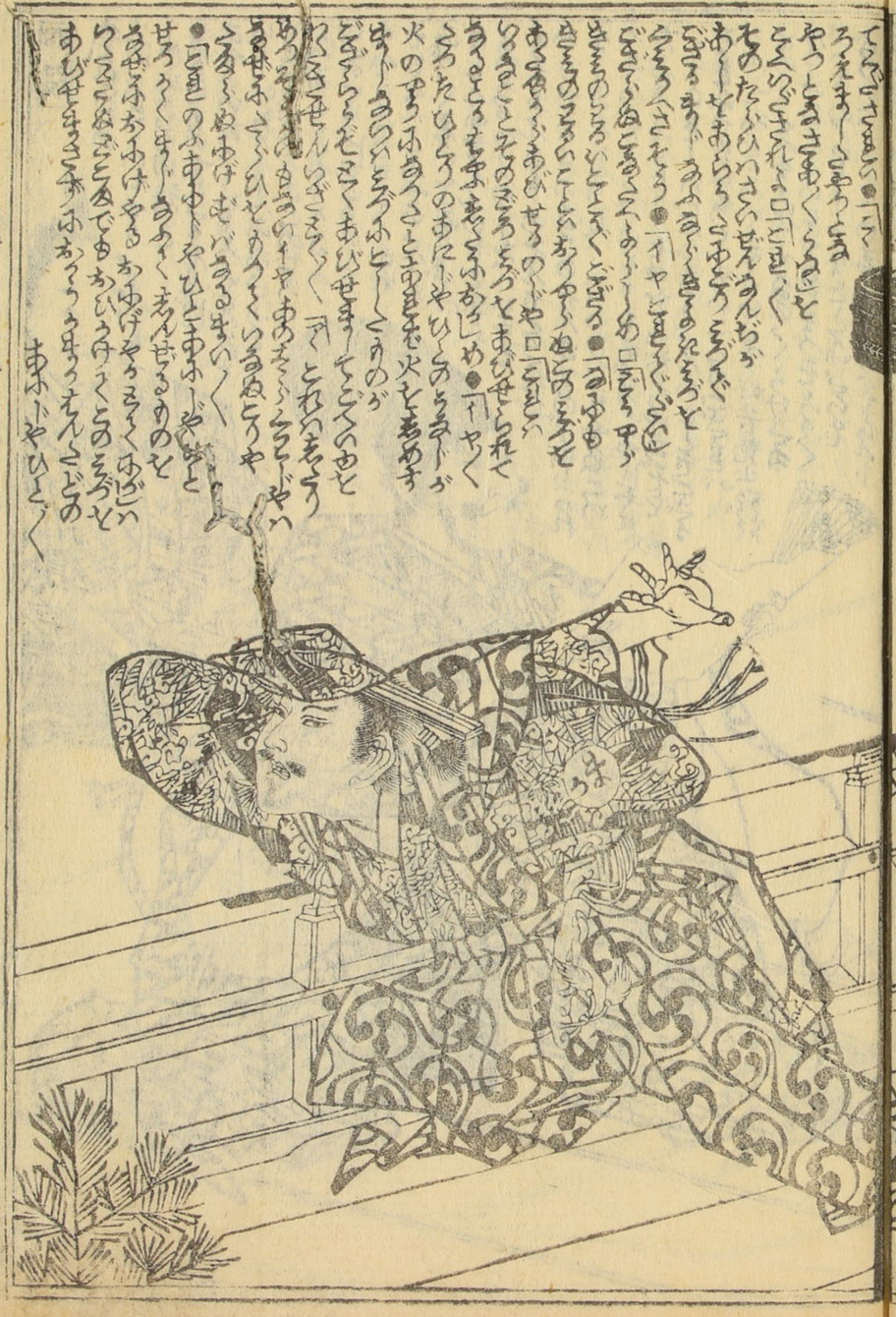
弟子一路とものみ毘奈耶ハ
父を波羅門として前条の説
さへ大に異あり尚般特
の愚鈍ある過去の業
因のくさぐく
本起經の説と
引て後編の本文
ふるゝ〳〵く著もぐ〳〵

三段●ものゝうあんあのゝうロイヤ
あゝそふこまあうあんあのがあるなどごうそ
ござる●「そんぢやくがきへつてござるロこまいそんぢく
ふあゝでやうさそびとんぢれふあゝでまする
●さればそびとんまのあゝでロがあるさの
ぢやくゝやとくさちゝのうおくゝのうされてござる
ロそれといくごあイやくあこでござろ
ヤアちあゝうそれぢやくふせんそくを
まゝあゝせい●「イヤせんそいふくふうい

▼●「そのぢんそびとうぢやくぢんでござまがあるあゝんぐすこととでござる
ロ「それまあゝがまゝあるそろぢんとのふ
ものそうゝいれがあるくぬそくござる●「ゝうゆもあるくとあゝがあるゝひもゝくそうゝがそろぢんとゝふりのいゝやゝゝのものできゆんゝまゆもさくぬものでゝござゝぬろロこまいかゝひもゝゝぬとそのひとまゝぢんぢやくぢやあるうそれぢやくふせんそくをまゝあゝせい●「イヤせんそいふくふうい
そのさんがのぢんのうちへ礼れござる
●「それゝあるがきとするとことぐぢやくろロまゝがあ

ゝゝぐゝござる口千二せんそくとくろ
ゝゝこゝとん●「ゝうふゆさんぜんをひとがをちくあゝせゝまゝあゝさがあてゆゆのうくえゆろゝぶゆうゆやうやゆあゆてゆゝーがゝゝでゆうさゆゆんゆくとゆゆあてゆこゝろをゝゝやまあまゝんせんそくゝゆひとゝゆゆまろことそゝゝぢゝぬロ「ゝゝゝゝこれゝゝうこゝをせんそくとゆろのことゆござろあゝらふゆろのことゆござろ●「イヤさあゆうゆふゆをちゝうをそくとぢゝをゝうゆぬせんそくとくゝゝ●「ゝまゝがゝゝをちくゝをゝをゝぬとゝゝゆぬせんそくとくゝゝ●「ゝまゝがゝゝをちくゝをゝをゝぬとゝゝゆぬせんそくとくゝゝござる口「ゝうさゆ●「ゝうりやくゝゝをちくゝをそくうゆぬせんそくぢやくゝゝをちくゝをそくうゆぬせんそくぢやくゝゝをちくゝをそくうゆぬせんそくぢ

[illegible]

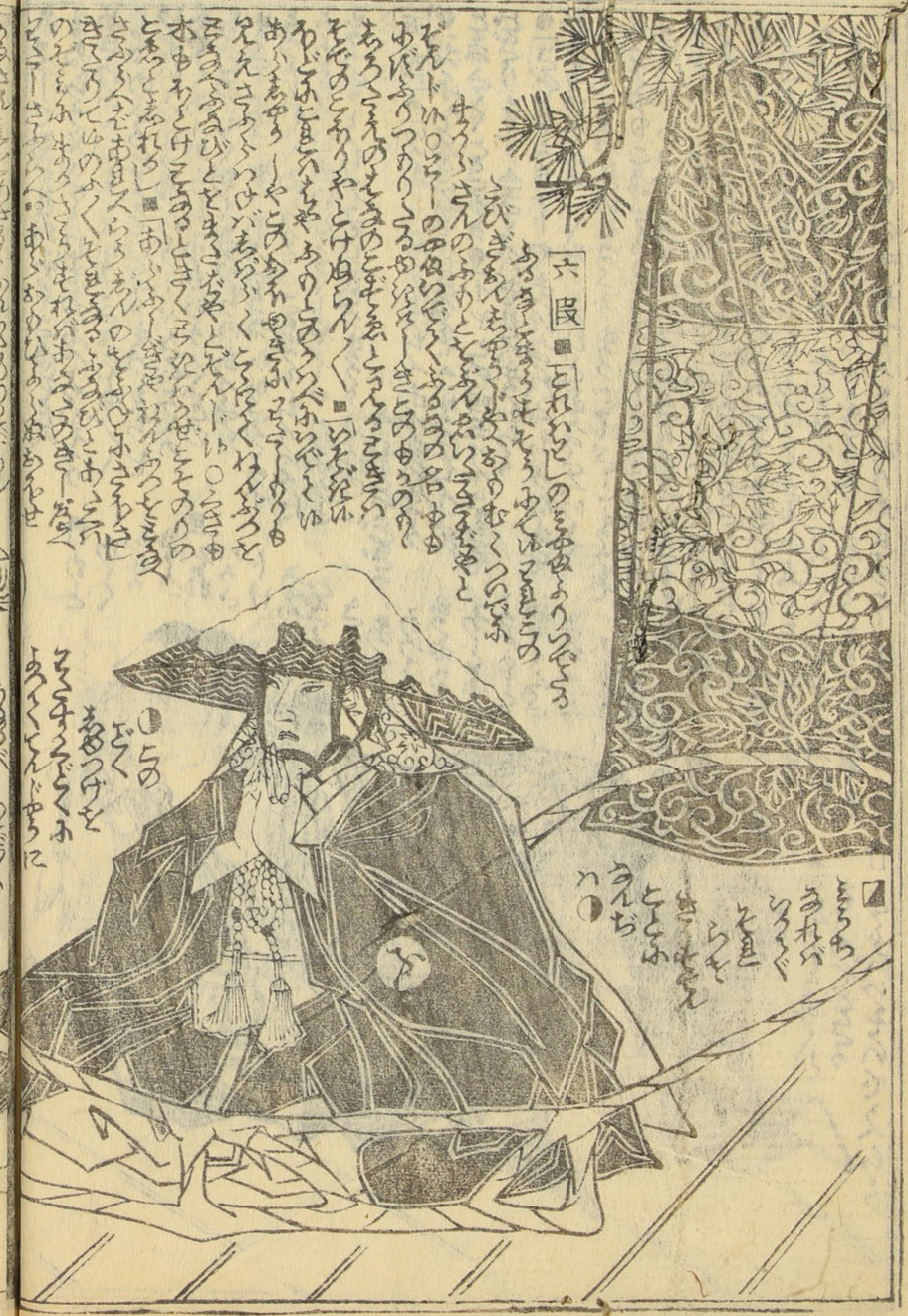


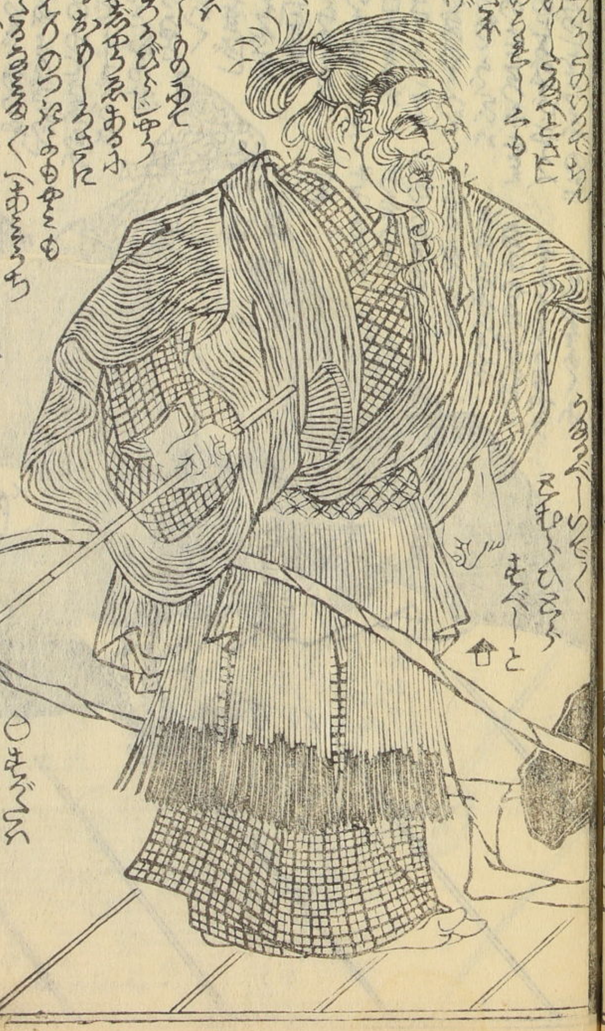
四段

▲これハこの
あめあとくのちやう
トや歴宇訶南親と
まうもものでござる七ちやう
あまさのたろ〳〵せのろくでござれと
けーいちやうくんふあくめるこの
ごとくなるおこのごろ
ふかうとやうがるふ
りくのてまろきうのら
まむこまのせそれあれ
もせもんとあそいうそい
ふぐくまのことそござる
きとこふせそんのせの字い
よのろのようのそれいきる
そもそれのうのそんきうのぐまふられ
きーこそまもたろくいうられきせぬこの
ろふのむーこてうもそろちやにやれ
たぶふうきこまーいごぶうぐんのことそござる
そこらまーいごぶうぐんのことそござる
そまふつきいあくまいこまのござまバ
うでおそろやそうくまう好若焼土ろくぐ
ぶのうくまろりてあのくうみくる
りくまこまのござまバきづそろりく
こまおらうイやきとこふぐろそ
ぶのへんろうのそみりつそそれ

六ちんのうそそんなむせそんとかとそ
かそうさくひとくのうくさらうくりの
あぐをねぐるこくんぐーねイやうみと
まうそうちそやこまバうろくぐのく
おやーまさぐぐるまぐこおあまのろく
まあらうさてこそおくあゆんのうんじや
がうくくチー　どあんあのうのこまます
まろあんちやうーやでござうまきせメイやまう
あんでおやらぐあんぐあんのふおうぶ
うくそうちへまのまあまバうぐさん
ませメこまんひうこーやまろうんりのい
ふまそくあいでやろくぐバチーとまバ
ぐひぶあつくまあのまーくぶこまバうぐ
まーこまぐあちまとまぐらぐあーこまは
がひぐまそうのあつくひつこんぐきあいまーこ
メこれいうぐこまきぶせをくりく　ちへ
ぐらくあまそうんくく　▲ヤレくうこ
ござるまそやのんどのあうまぐらそあーこ
ござるござろうさんいたのてもうぐませぬれ
ひぐまぐまうぐござうまうメこれいこのやう
こまりーや　▲されバそのこまりいあうくぐ
ちのうくんちうひとくんぐひとやそうこ
まんとこまそぐちいぐるう　▲うるもそもく
でもござうまうメこれいこのやう
ござうまうメこれいこのやう
てんちのうくんちうひとくんぐひとやそうこ
まんとこまそぐちいぐるう　▲うるもそもく
でもござうまうメこれいこのやう
ござうまうメこれいこのやう

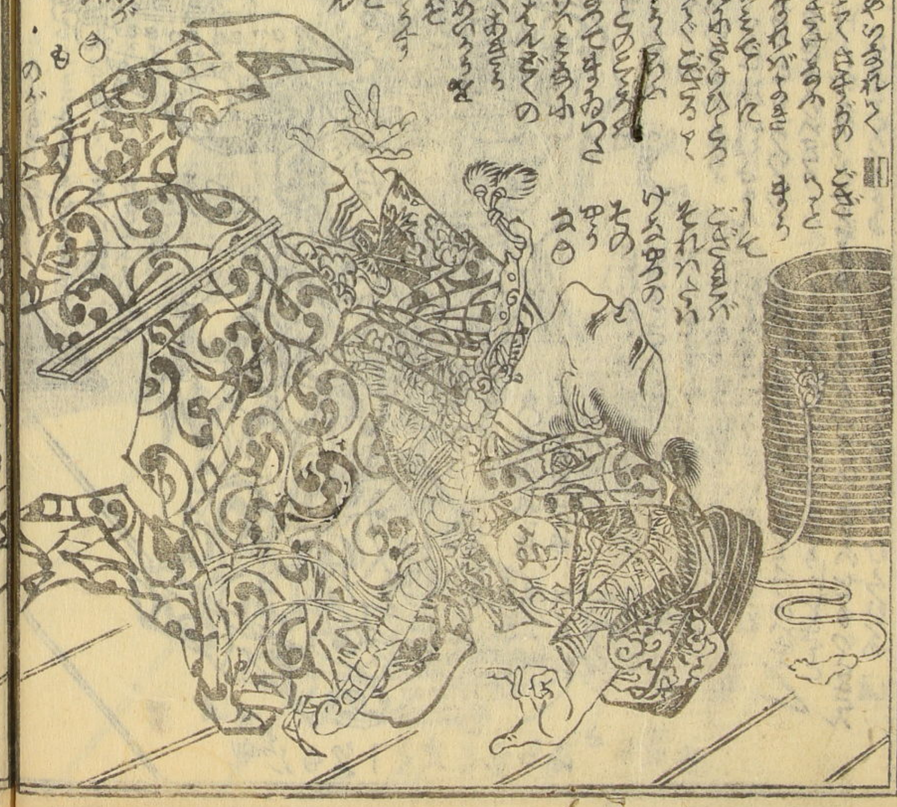
六段

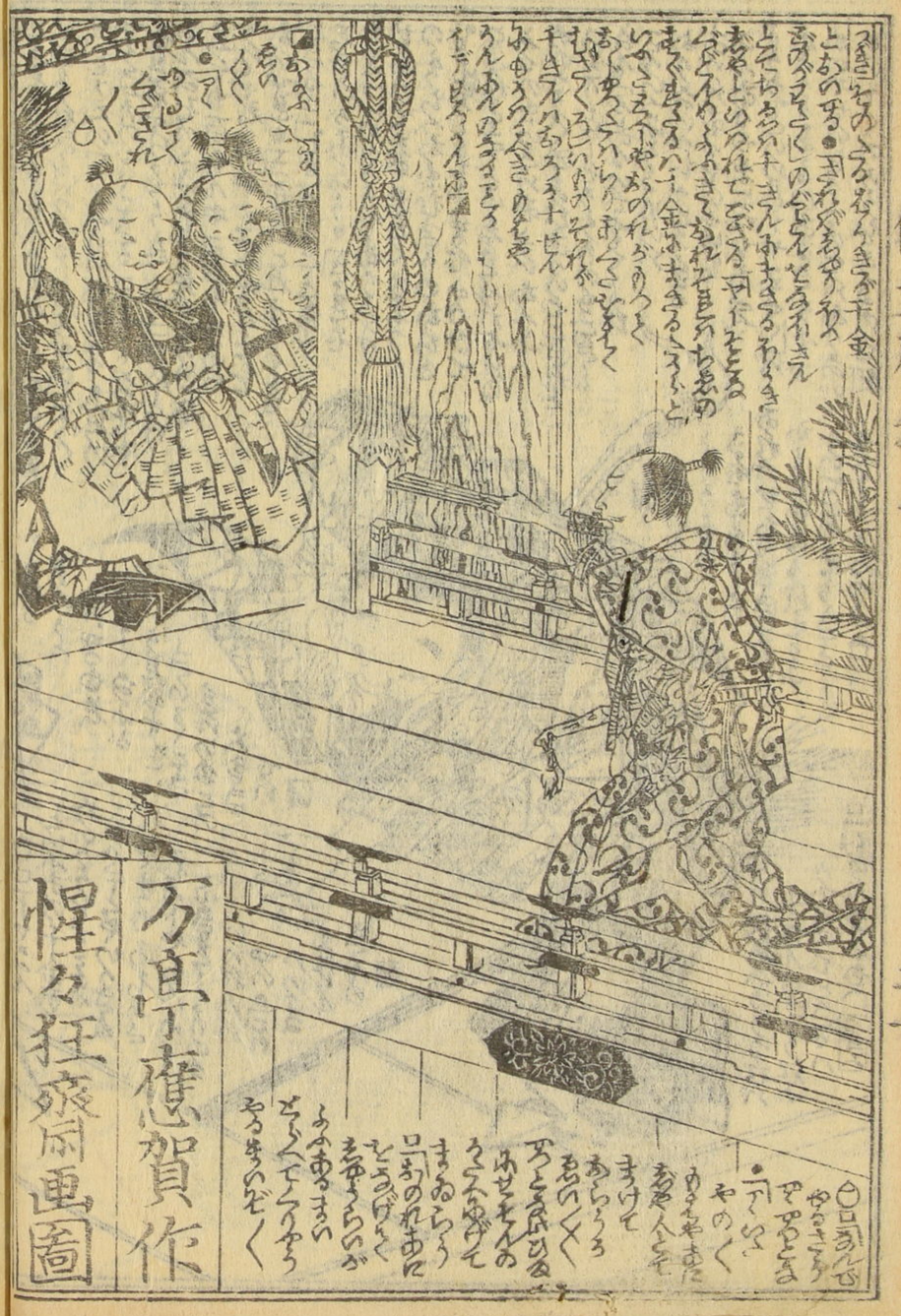




七段

八段





万亭應賀作
惺々狂痴画圖

文久四年甲子春新版目録

傾文庫

五十二編 五十三編 五十四編 一陽齋豊國画

重井筒染別小紋 八編 大尾

為永春水作
歌川豊國画

新編朝日譚 二編 三編

柳亭種彦作
一恵齋芳艶画

花山吹百人女郎 初編 二編

柳亭種彦作
同画

沖津みやげ 五編 大尾

十返舎一九作
同画

常磐津懐中本 初編 二編 三編 四編 あり 極上本あり

彙繪草紙本類問屋

人形町上州屋重藏板

倭文庫 五拾四編

錦重堂梓

上

書物を潮の深るを去法

一大なる桶をもとめ

清水をかよくく

うつしうるをまつて

書物の表紙をそと

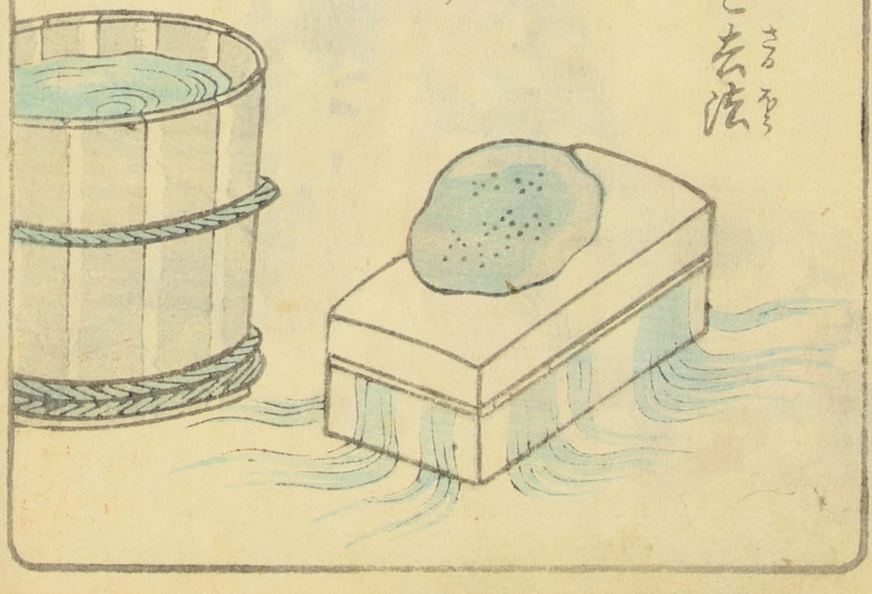
そよめひらき

潮水にひたし

上下よりメかるく

あをきりうかめ

のちおだんをおべく



釋迦八相倭文庫第五十四編序

此世界の衆生が豆腐働ハ彼岸の豆煎の如し去バ堅き豆を噛ハ

神ありて陽あり噛て解バ是佛ありて陰あり其和きて原ぐいて老少

の歯ふ合ふるハ堅き豆を除むがるぬが豆へ小豆の無ル異名ゆへ故

煎種中へ梵説筆豆を法録ふ書校て既に阿鼻の黒焦とある亀

茲國の惡毒王を茲あい北天の王ふ擬ひ妙法蓮華經の三僧を南無

帰命頂禮と做ど更ふ芳き甘味ふもつく翻て半煎の腥ふ化ひつくも

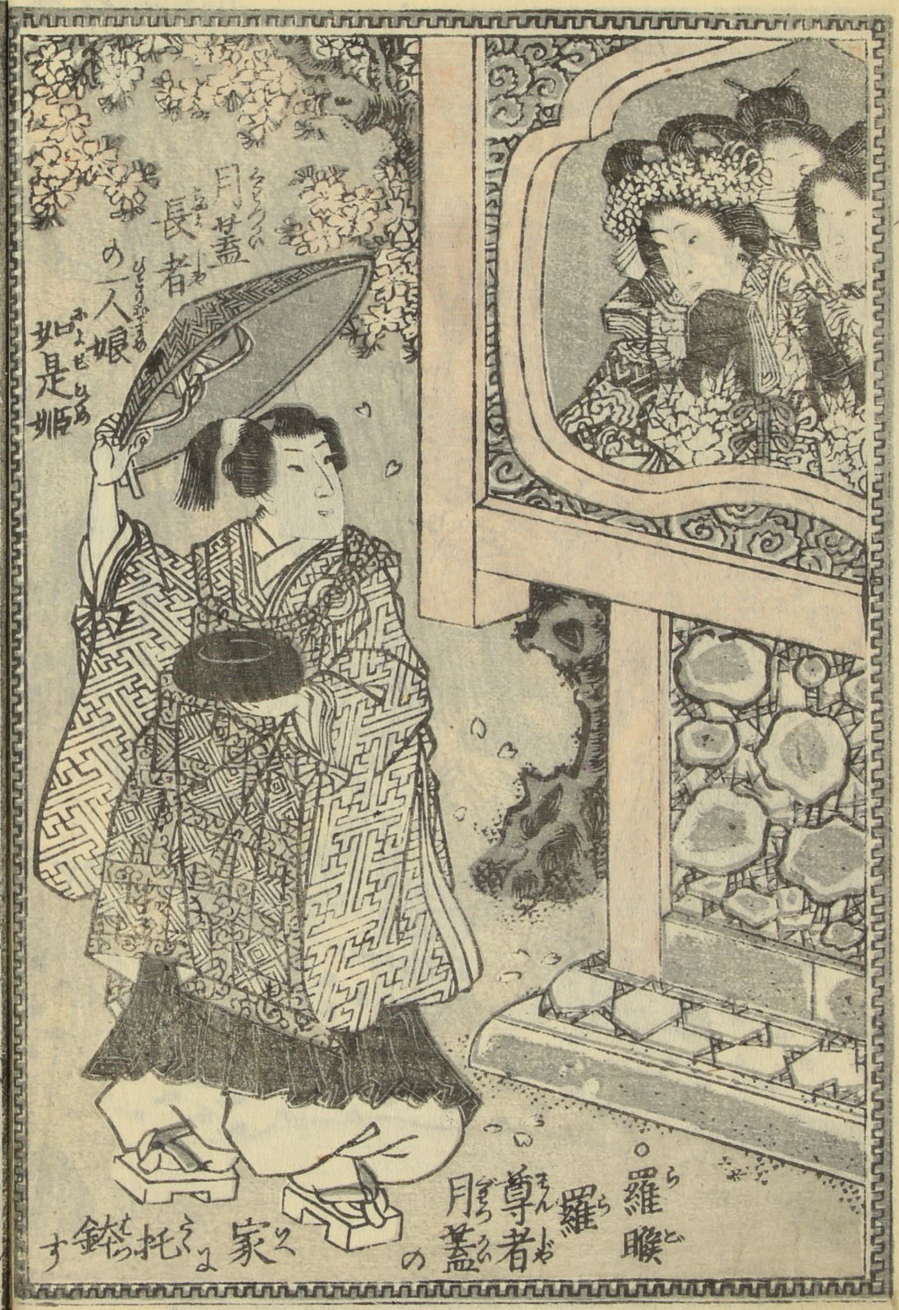
一条宛穿らバ一夕の茶うもふ唯一抔に呑込バ腹の中あそブつくと

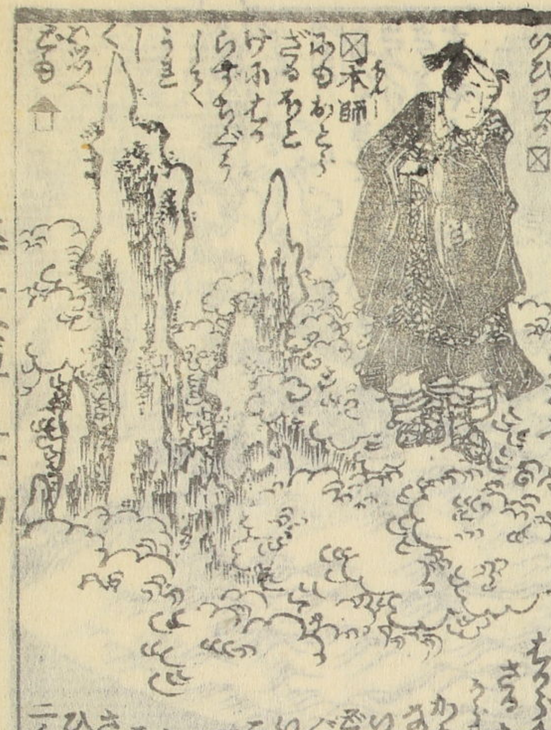
俳めくとも可有也

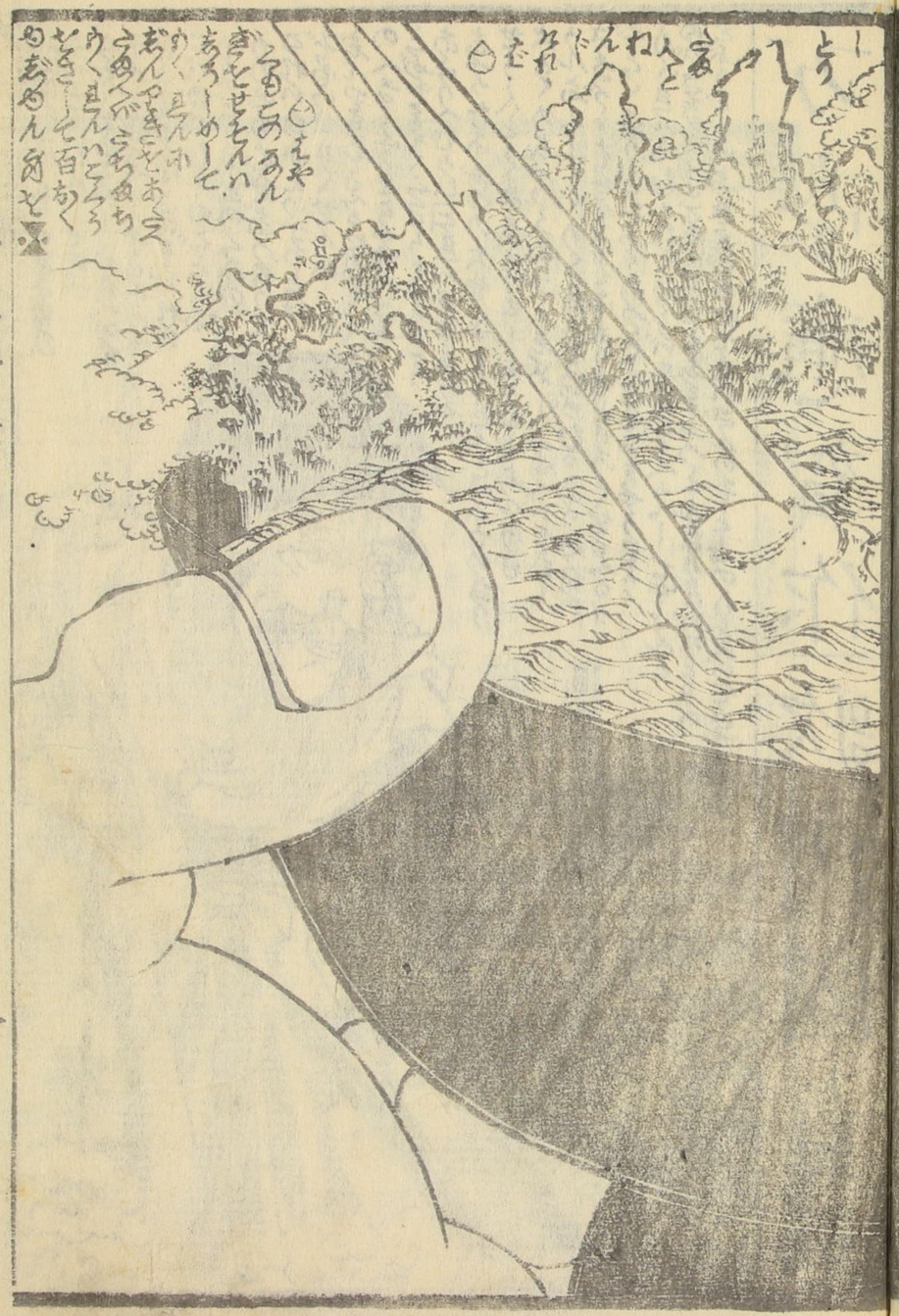
慶應三寅春

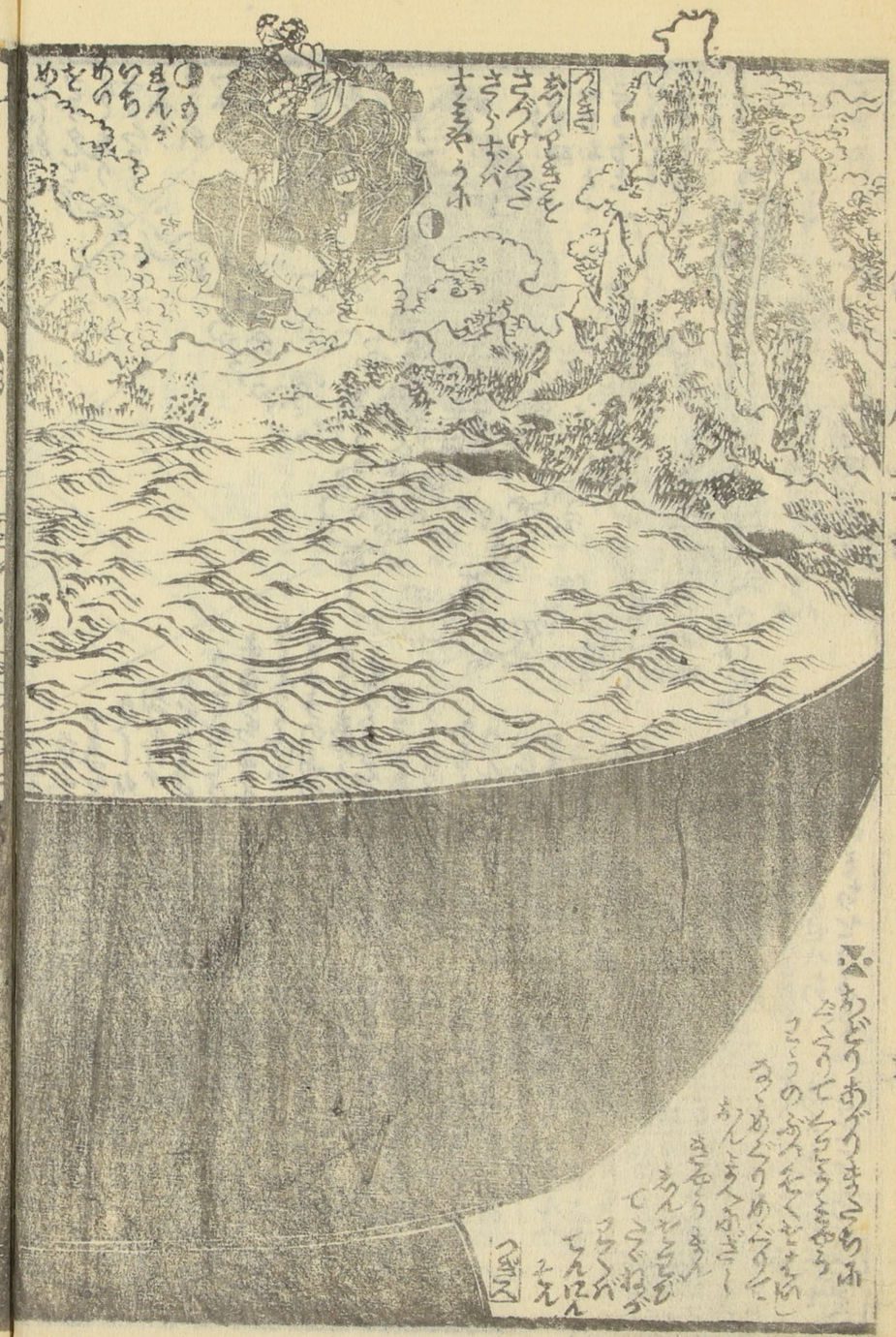
万亭應賀述

北天竺毘舎離國
惡毒王六字妙文
を唱へ一功德を依
て五逆十惡乃
大罪を免る


目連尊者
羅睺羅
家の月蓋長者の一人娘
如是姫
鉢を托げます




(一)とう
(二)家とねんと
(三)それを
(四)そや
(五)ごのあんまもせそれんあろーめーそ
(六)あんやまさとおうそうめんべうちぬうくまんいそろうそさーそ百あくめあめんそ


(一)あんやまさとおうそうめんべうちぬうくまんいそろうそさーそ百あくめあめんそ
(二)ごうあごうまさちぬ
(三)ごうてとうそうまおうそうのぶんをくせよ
(四)なさめぐりめうりに
(五)あんとうへんぎー
(六)さそうそう
(七)えんとうそびてうぐねづうぐんぐんにんえ

万亭應賀作
歌川國貞画

嘉永元申年初春より上演す狂言番組引札

奥泰公出世雙六

大錦繪 一枚 梅素樓國貞画

獨娘賀八人出世雙六

大錦繪 一枚 万亭應賀作

男女役替壽語六

同 作

樂屋表の方へ

二度有役者三階手伝ひ之節ハ此ところ出ル事

奥泰公出世双六

應賀作 豊國画

武家奉公出世双六

同 作

子寶延命袋

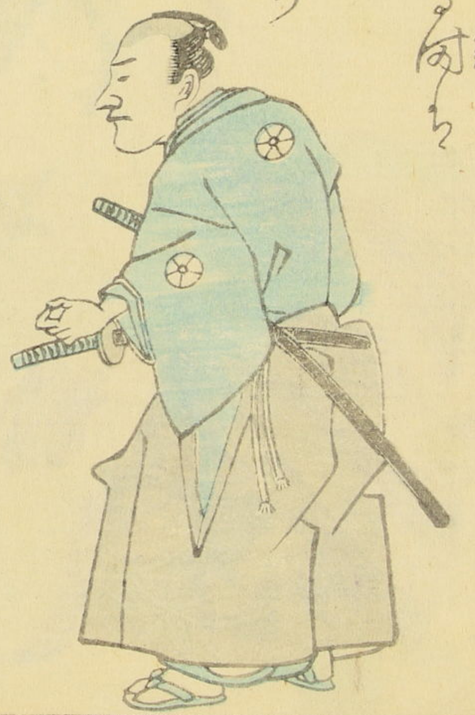
同 作 全一冊

為泰双六

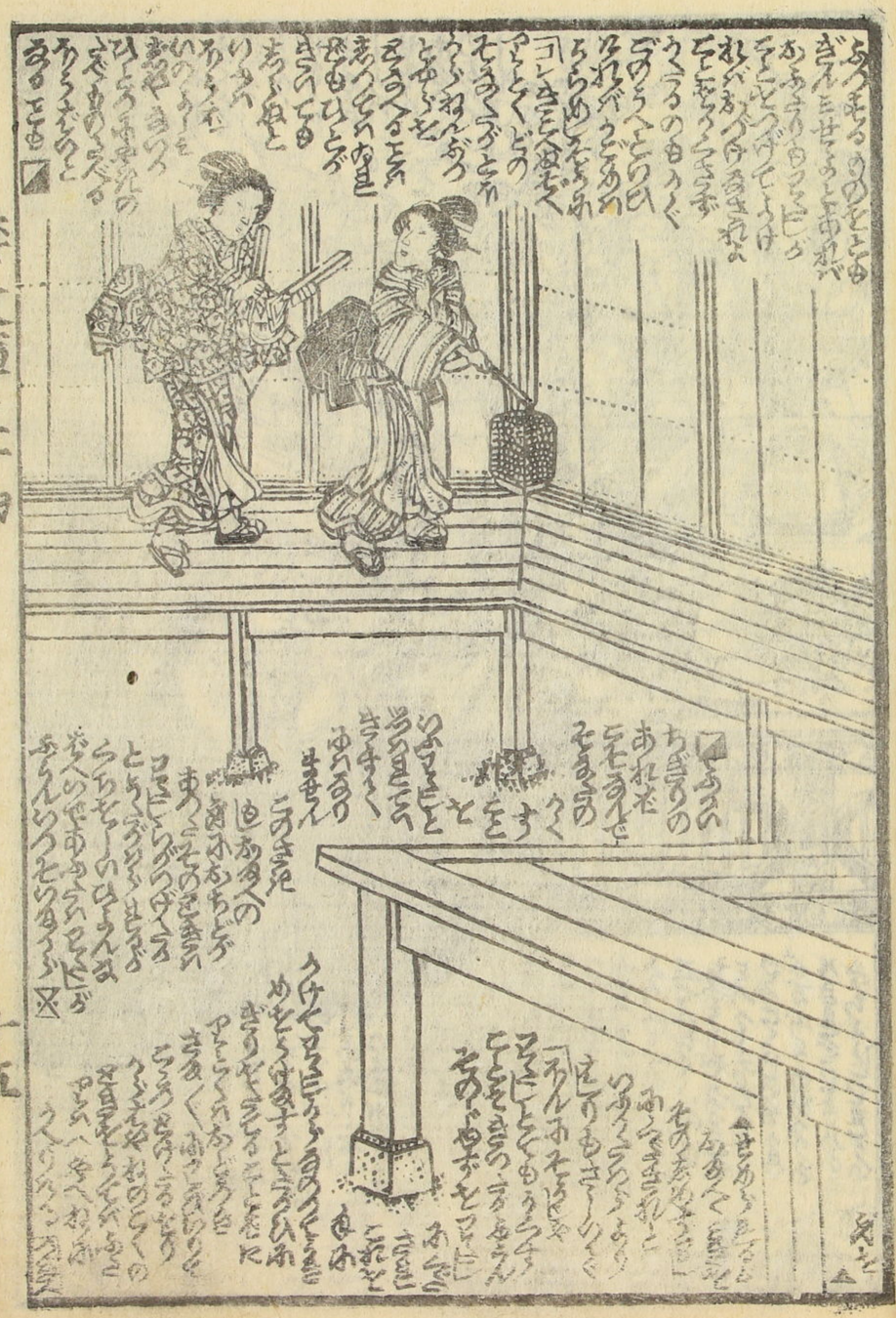
同 作

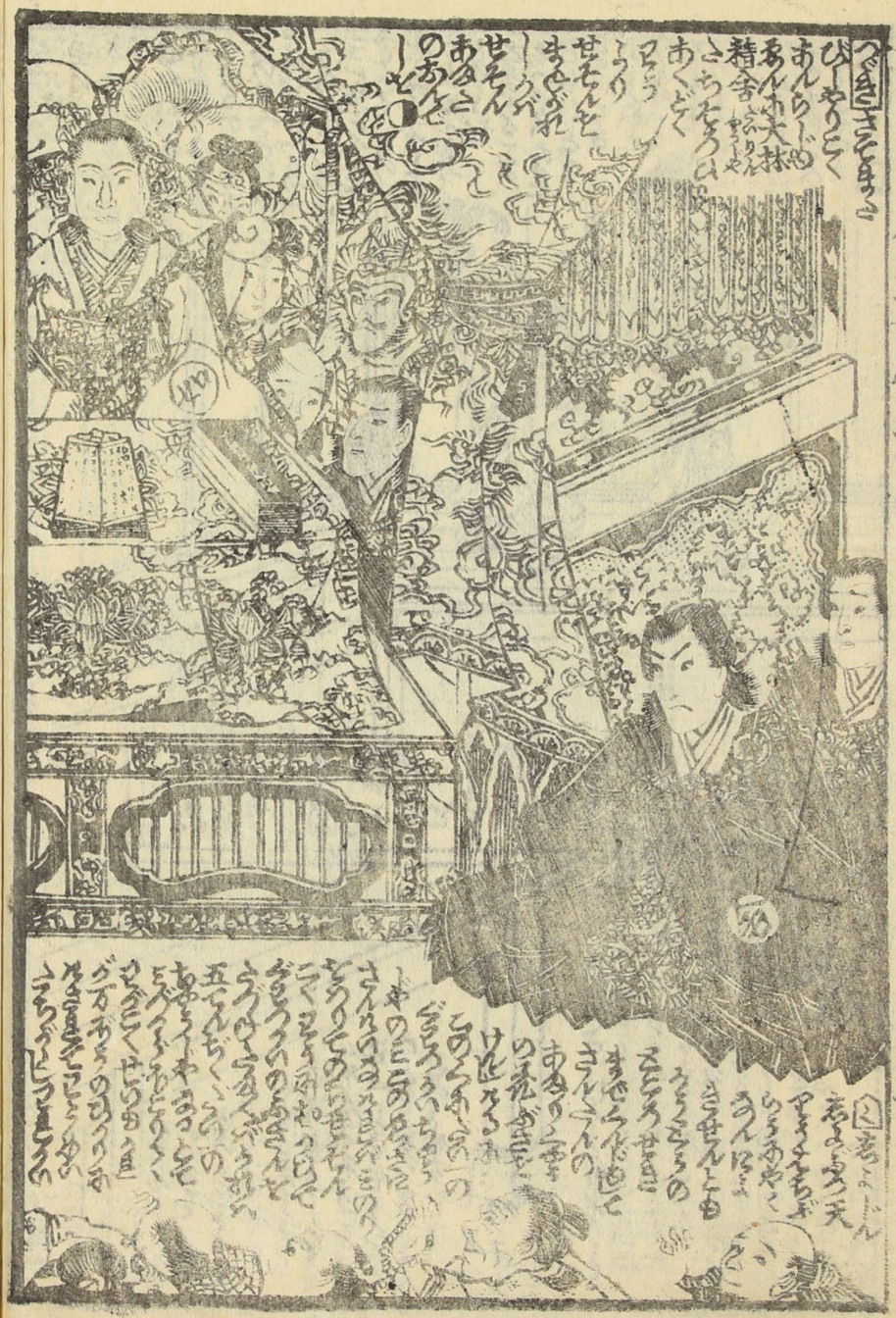
一乃亭應賀作
歌川國貞画

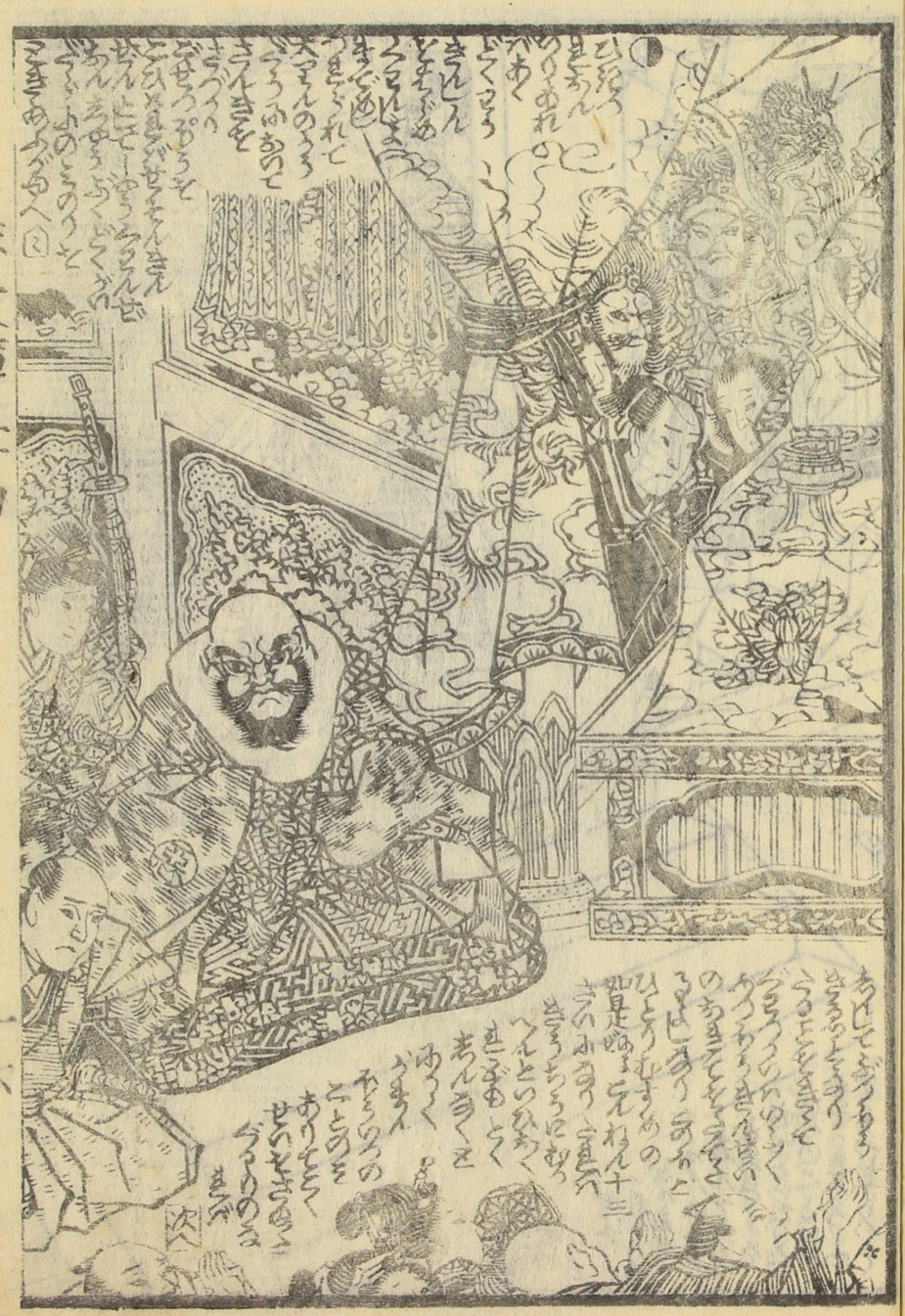
「あつめぶを　夜鮫の紋
一名蛇の衣まとひ
紋あそこそこ色こそ剣
艶のもぐりこそ妹
ぬりつけ干ぬこそ
こんどんの形を
ありこのそこそ
こそほつつおこそ
りみおこそび
こそも姫かおつこと

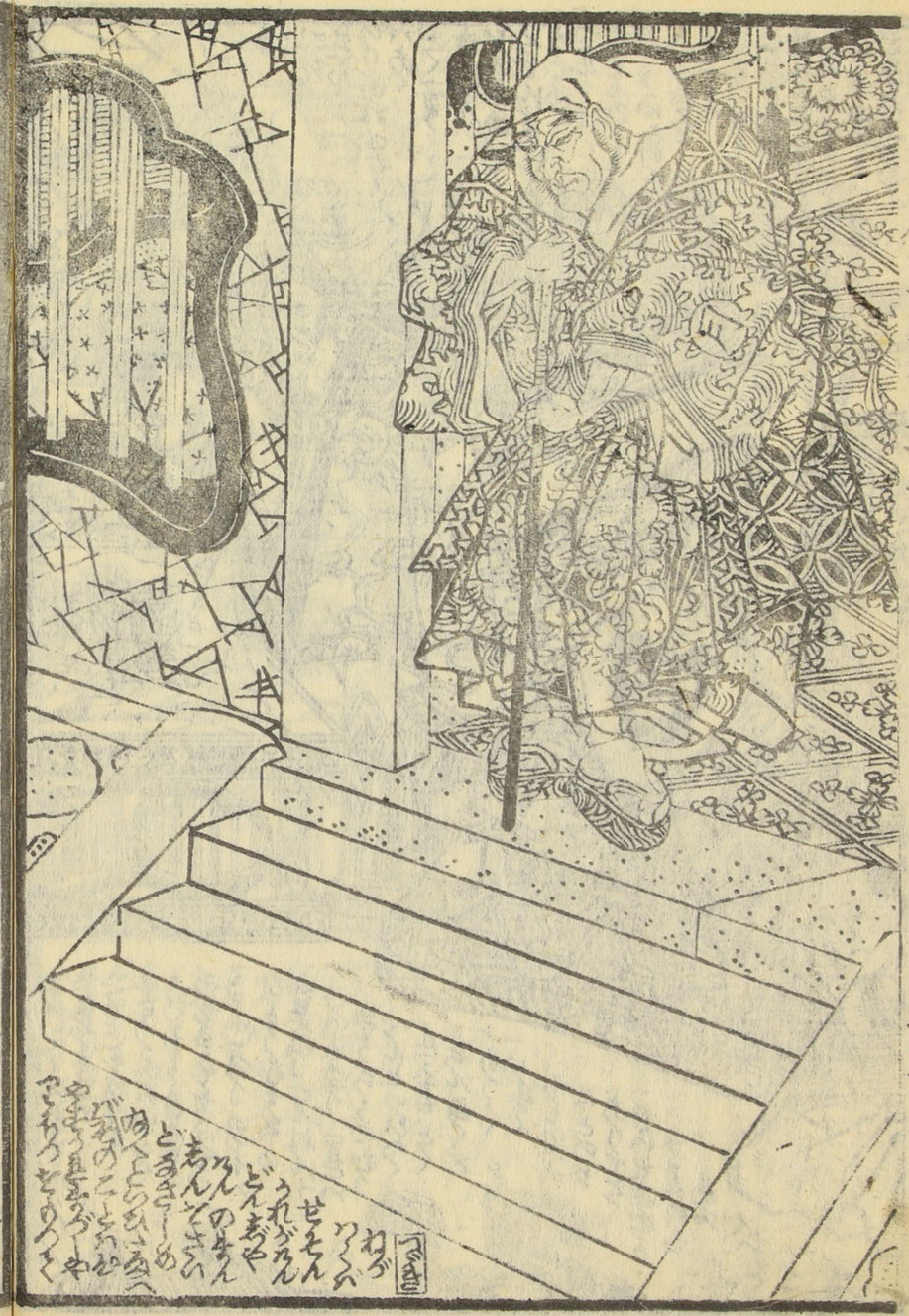


五十四編下の巻
月盖長者のこそ娘のこそ
あめへ血のこそを
ありてヨヤヨこそくとの
まごろもこそくらいもあり
せかふりまこそ
生てこそのうそのあ
ありけいこそくこそのこそ
こそうそのりこそ
あいりそこそこそ
あのうつこそ
おこそうこそのこそ
こそのあいこそ
さんかあくこそ
こそきこそこそ
こそくこそこそ
きんこそこそ
そのこそのこそ
五こそくこそいちの
こそけりこそれこそも
こそうこそんへのこそ
さこそうりいこそこそ
そのこれこそもあや
こそこそこそこそ
こそんせんこそ
つづく

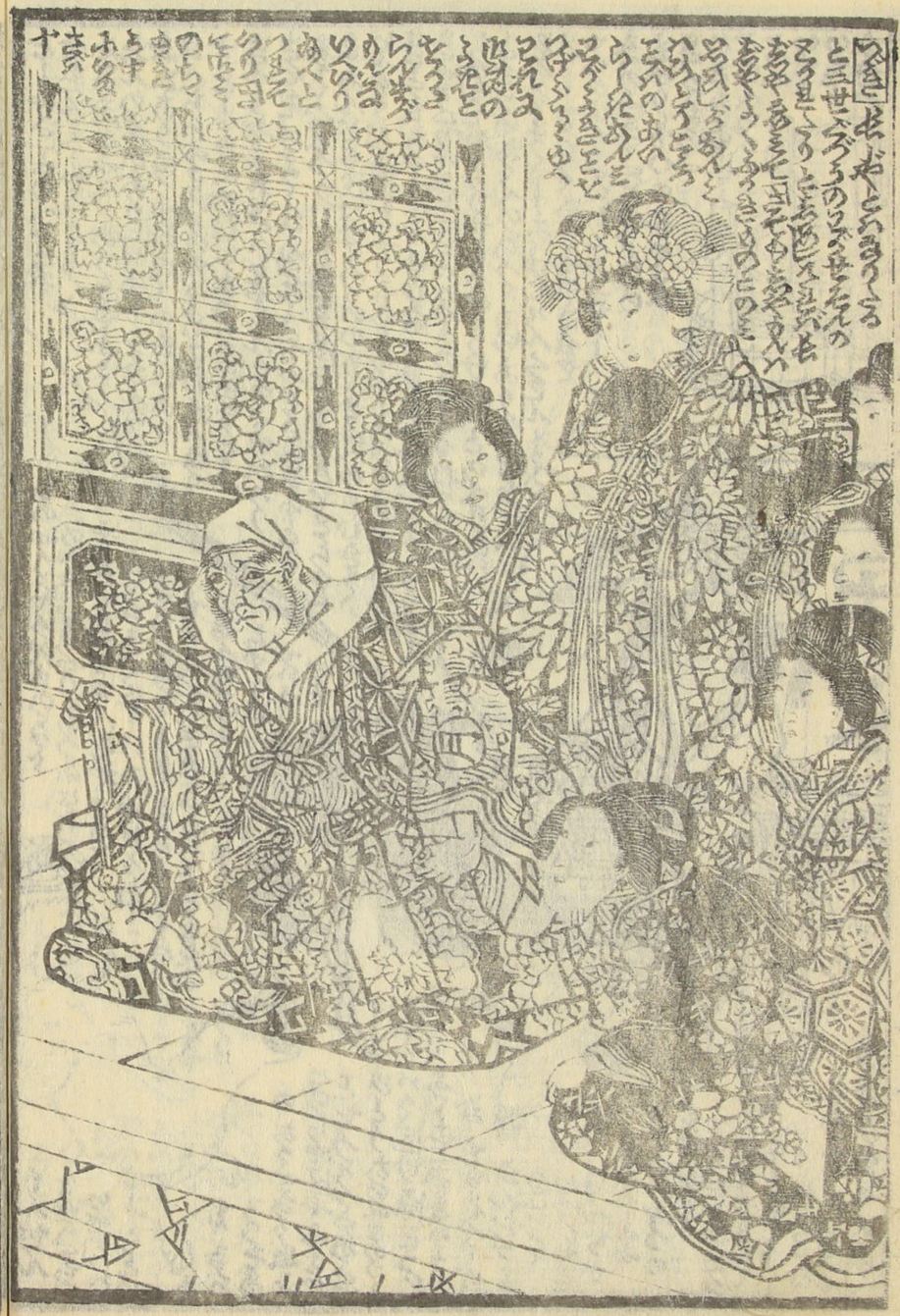


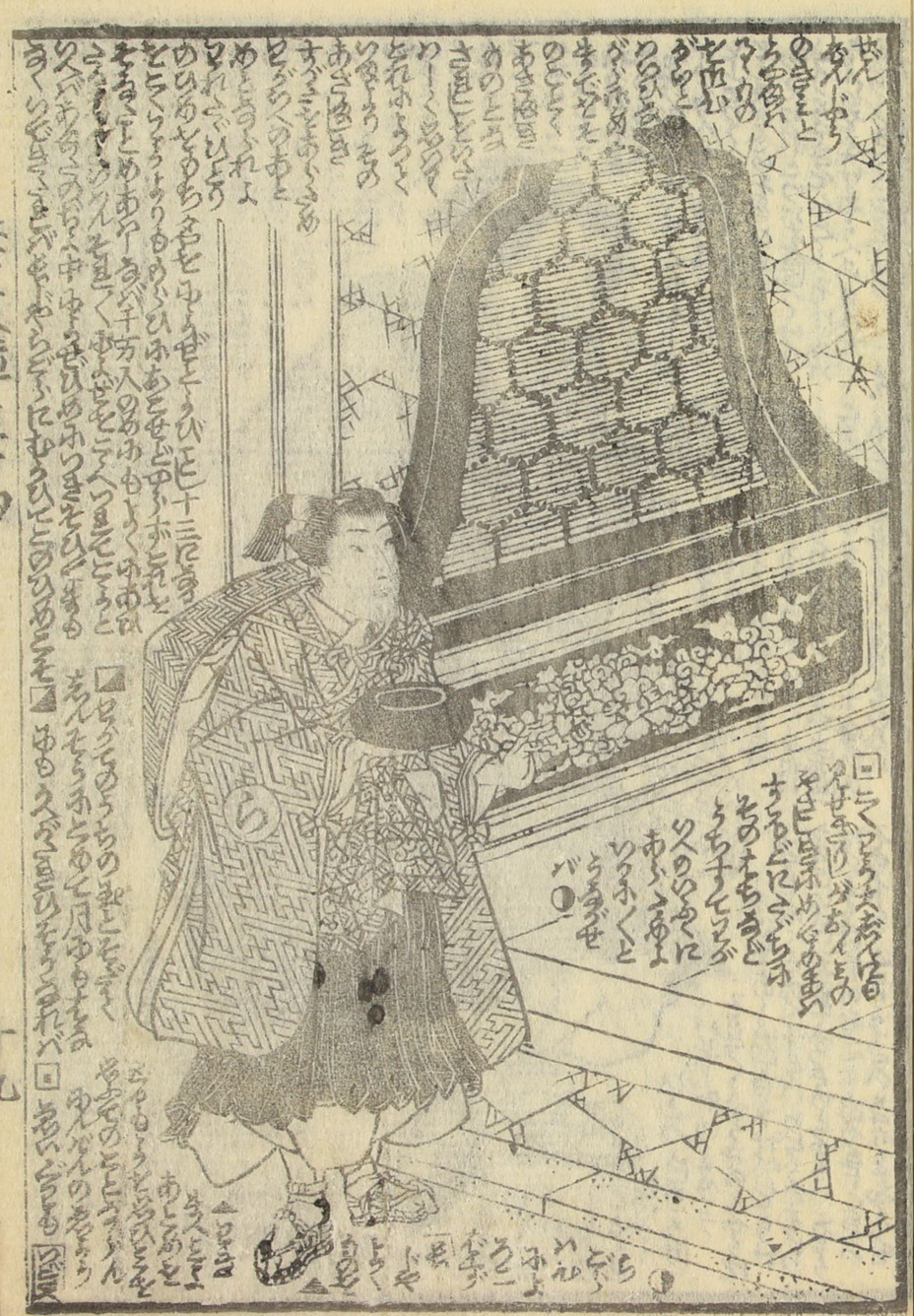






舍





万亭應賀著　一壽齋國貞画

▼ひろいどころをあんじつゝ
うろうろあるきまわりいぢ
こゝろこゝへとさがしもち
まつゝちやんとうーぢど
とのをそのまゝくゝらりんと
うつておかへくー
いぢまわくせあんえんと
そでのりんへらぐくと
やぢうのせわしなくめを
あとこうしてそのまゝゆめ
とありくうぢやうぢやうを
よをうろうろあるきまわる

◐そでのりんへらぐくと
おのぢへやゆぢのりにそも
ちぐさー〳〵〳〵
五十五へんめきつゞき
ちやうだん仕わけ
はらんのうぢど
おづひとやゆ

▲うぐひす
きやうちやんなぜそのやうにてをこするぞ
ことあらいとぢやのまつさ
ことをきくとおもちやんいせ
そやぜうくんをぢうくをこ
いづるうくふさあくんちやん
いづるかこをちやくんとあるよふ

慶應二年丙寅春新版目録

倭文庫

新編朝日譚　五編　柳亭種彦作　六編　一恵齋芳艮画

重井菱染別小紋　編永春水作　八編　歌川豊國画

常磐津懐中本　初編二冊　三編四冊　小本　一寿齋國貞画

童謡草紙　十返舎一九作　同　画

人形町　上総屋忠兵衛　梓

外毛箱